

○1 富山県の縄文遺跡出土の鯨類遺体

町田賢一（富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）

Cetacean remains excavated from Jomon Period sites in Toyama Prefecture

Kenichi Machida (Toyama Prefectural Research Office for Archaeological Heritage)

【緒論】 富山県下では、1990年代末までに縄文時代の6遺跡（氷見市朝日貝塚・大境洞窟遺跡・十二町潟排水機場遺跡、富山市北代遺跡・小竹貝塚、朝日町境A遺跡）から鯨類遺体が出土していた（平口, 1999）。近年、氷見市の上久津呂中屋（かみくづろなかや）遺跡で多くの鯨類遺体が新たに出土した（石川 2005・杉山 2006）。本報告では、この資料の概略を紹介し、従前の資料を加えて富山県下出土の鯨類遺体のあり方について考えてみたい。

【上久津呂中屋遺跡の鯨類遺体】 上久津呂中屋遺跡は、能登半島の東側つけ根にあたる氷見市の南西部に位置する。現汀線から約5km離れた内陸にあり、西方の宝達山から延びる丘陵裾部にある。発掘調査は能越自動車道建設に先立ち2003年から3か年にわたって実施した。縄文早期末葉～前期初頭の貝塚、縄文早期後葉～後期前葉の土器・石器、動植物遺体などが大量に廃棄された谷、弥生後期・中世の遺構などが検出された。鯨類遺体が出土したのは上記の谷と貝塚からである。

【結果・考察】 上久津呂中屋遺跡ではシカ・イノシシなどの獣骨、マグロ・カワハギなどの魚骨とともに、イルカ類の各部位の骨が多数出土している。イルカ類は、上顎骨や第一頸椎で見たかぎり、マイルカが主体をなしているようである。ハンドウイルカとみられる上顎・腰椎・指骨、ゴンドウクジラ属とみられる腰椎なども出土している。さらに注目すべきは、縄文時代遺物としては全国初例とみてよい、全長11cmの“イルカ形土製品”が1点出土していることである。この土製品は、目や鰭はないものの、口先が細い頭部と丸く丸めた体形、そして尾鰭が魚類と違って水平にリアルに表現されており、イルカ類をモチーフとしていることは明らかである。

以上のように、カマイルカよりも外洋性が強いはずのマイルカが富山湾西部沿岸の遺跡においてイルカ類の主体をなすという特徴は、朝日貝塚でも確認されている（平口, 1986）。大境洞窟遺跡や七尾湾奥の七尾市三引遺跡（平口, 2005）でもその傾向が認められる。富山湾西部沿岸の縄文時代イルカ漁は、能登半島先端部の石川県真脇遺跡で推定されたカマイルカ突き捕り漁よりも、マイルカ追い込み漁のほうが主流をなす可能性が高い。ただし、富山湾東部沿岸の境A遺跡ではカマイルカのみ（金子, 1992）、富山湾中部沿岸の小竹貝塚ではマイルカとカマイルカがほぼ同数（平口, 1986）など、様相が異なる。今後はこうした地域差についてもイルカの習性と遺跡の立地条件を合わせ考えながら検討していきたい。

○2 盤龜台岩刻画の捕鯨図再検討

平口哲夫（金沢医科大学）

A reexamination of the whaling pictures of the Bangudae petroglyph in Ulsan, Korea

Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University)

韓国盤龜台岩刻画の捕鯨図のなかで最も重要な「銛綱使用の捕鯨図」（以下「捕鯨図」と表記）については、浮き袋も描かれているという説（張、1997）がある。この説が正しいかどうかを確認するため、2008年5月17日、第14回蔚山くじら祭りに参加した際に現地見学し、また韓国鯨類研究所で意見交換会を持つことができたので、「捕鯨図」について再検討してみることにする。

1982・83年真脇遺跡から多量出土したイルカ骨の調査を機に、先史時代捕鯨に関心を持った演者は、盤龜台岩刻画の調査報告書（黄・文、1984、以下『報告書』と呼ぶ）を入手し、その鯨類画を見て、鯨種をいくつか同定できそうだと思った。そこで、1990年2月、千葉県鴨川市で開催された第2回IBI研究集会にて盤龜台岩刻画を紹介、また、同年5月、日本考古学協会第56回総会と日本海セトロジー研究グループ第1回研究会にて、盤龜台の鯨類画がセミクジラ、コククジラ、ナガスクジラ属またはザトウクジラ、アカボウクジラ科？、ゴンドウクジラ属？、マッコウクジラなど、少なくとも6種同定できることを指摘した。さらに同年7月末～8月初に韓国を訪問、釜山水産大学教授の朴九秉先生（1930-2006）に導かれて盤龜台を見学したが、岩刻画は水没状態にあり、周囲の地形を観察するにとどまった。また、2003年5月末～6月初に第9回蔚山くじら祭りに参加したときは、台風のため現地見学さえできなかった。

今回、盤龜台を訪れてみると、岩刻画のある岸壁の対岸まで歩道が建設されており、歩道入り口の駐車場から楽に歩いて行けるようになっていた。対岸には岩刻画の実大図と望遠鏡が設置されていたが、望遠鏡を覗いてみても鮮明には見えないため、河原に降り立って水流まで近づき、カメラの望遠レンズを通して見たところ、いくつかの画像を確認することができた。しかし、肝心の「捕鯨図」は見あたらなかった。

韓国鯨類研究所に隣接する“くじら博物館”には、盤龜台岩刻画の実大レプリカが展示されているが、「捕鯨図」があるべき箇所を見てもその図はない。「捕鯨図」は、比較的小さく、細く浅い線刻によって描かれているので、この図がレプリカに示されていない原因がレプリカ制作の技術的制約によるのではないとする、ダムに水没していた岩刻画が異常渇水で最発見された1971年当時よりも岩刻画の風化が進み、レプリカ制作時には不鮮明になってしまったのかもしれない。ならば、再発見当初に撮られた写真や拓影の資料的価値はきわめて高いことになる。そこで今回改めて『報告書』に掲載された写真や拓影を見てみると、「捕鯨図」の銛綱に接して描かれている浮き袋状の線刻は、その捕鯨図とは違って太目の荒っぽい刻み方をしていることが分かり、「捕鯨図」とは別に描かれたとみなす報告者の判断が正しいという結論に達した。

○3 インドネシア、ラマレラ村の捕鯨記録 2006～2008

○江上幹幸（沖縄国際大学）、小島曠太郎（作家）

Records of whaling in Lamalera village, Indonesia during 2006-2008

Tomoko Egami (Okinawa International University) and Koutaro Kojima (Writer)

【緒論】インドネシアの小スンダ列島の東部に位置するレンバタ島、ラマレラ村ではプレダンと称する手漕ぎの木造帆船で手投げ銛によりマッコウクジラを主獲物としてイルカ類などを捕獲する伝統捕鯨が400年もの間継続し、それら獲物を媒介として山の民と農作物の物々交換をするという経済システムを維持してきた。

私たちがラマレラ村に入った1993年当時と、21世紀に入ったここ数年ではラマレラ捕鯨は急速に変化を遂げた。第17回大会では2000年から2005年までの6年間における捕鯨法の変化と捕鯨記録を発表したが、今回は継続調査で得られた資料をもとに、2006年から2008年月5月までの捕鯨記録を中心に報告する。

【方法】前回調査同様に毎年一回以上ラマレラ村に滞在し、捕鯨法の変化や捕獲頭数、村の出来事などを記録した。捕鯨調査ではプレダンに同乗して捕獲に参加し、写真撮影をした。調査は2006年8月から2008年5月までに計4回実施した。

【結果・考察】ラマレラ村の伝統捕鯨は一貫して突取式捕鯨であり、伝統的な手漕ぎ帆船プレダンでおこなう「プレダン捕鯨」である。その他に船外機搭載の動力船があり、マンタ類、ゴンドウクジラ類、イルカ類などを捕獲している。

第17回大会の発表時点では2005年の捕獲頭数は2頭、その後3頭捕獲されて2005年は計5頭になったが、不漁年に終わった。2006年も3月までに4回の捕獲機会で4頭捕獲したが、漁期の捕獲はなく、1983年の2頭、1989年の4頭以来の歴史的な不漁年となった。このため、2007年はカトリック教会神父の許可を得て、1月に初めて日曜日出漁での捕獲が実現した。漁期入り翌日の5月2日には体長18mで頭部の白いラマレラ捕鯨史上最大の雄鯨を捕獲し、これ以降大漁となった。特に7月中旬から8月末に大群の回遊があり、7月には1週間で11頭、8月には1週間で13頭と、ほぼ全プレダンが捕獲を経験した。年間捕獲数は43頭で、1969年の56頭に次ぎ1968・1971年の43頭と並ぶ36年ぶりの歴史的な大漁年となった。2008年は漁期入りの5月10日に4頭の捕獲があり、現時点では7頭と好漁である。

漁法の変化については、2002年の「動力プレダン」の出現以降この傾向は加速し、2008年には4隻が加わり8隻が船外機搭載可能なプレダンに変貌した。動力船の総数も今年3隻が新造されて26隻に増加した。「動力船銛漁」が盛んになり、動力船がプレダンを曳航してマッコウクジラを追尾する捕鯨法はすでに定着した。

2008年は「動力プレダン元年」と言えるが、動力プレダンは通常は帆走し、船外機は補助推進具として使用している。現時点のラマレラ村は、動力化の波に乗りながらも伝統的なプレダン捕鯨を存続させる新たな漁業形態を模索している。

〇4 カナダ、纽ーファンドランドおよびラブラドル州における 商業捕鯨の歴史－特に日本との関係を中心に－

浜口尚（園田学園女子大学短期大学部）

A History of whaling in Newfoundland and Labrador, Canada with special reference to the Japan-Newfoundland relationship

Hisashi Hamaguchi (Sonoda Women's College)

カナダ、纽ーファンドランドおよびラブラドル州における現代型沿岸基地式捕鯨について、ディキンソンとサンガーが一連の著作を発表し (Dickinson and Sanger 2001, 2005), その多くを知ることができるようになった。しかしながら、纽ーファンドランドにおける日本企業の捕鯨事業については、極洋捕鯨と大洋漁業を混同するなどの不正確な箇所も見受けられる。本発表においてはディキンソンとサンガーの著作に加えて、現地調査結果および日本側資料も併用して、捕鯨事業が取り持った日本と纽ーファンドランドの相互関係について報告する。

1898 年にノルウェーより現代的な捕鯨技術の導入によって創始された纽ーファンドランドの捕鯨事業は 1904 年に第一次最盛期を迎える。1916 年漁期終了後に一時中断されるに至った。この間の操業は纽ーファンドランドの地域経済に大きく貢献したのみならず、日本における捕鯨産業の発展にも大きな影響を与えた。すなわち、ノルウェーで建造され纽ーファンドランドで使用されていた捕鯨船 6 隻（後の第二東郷丸など）が 1904 年から 1909 年の間に新たに設立された日本の捕鯨会社に売却されたのである。このように現代型捕鯨の創成期において纽ーファンドランドの捕鯨産業から恩恵を受けた日本の捕鯨産業であったが、纽ーファンドランドにおける商業捕鯨の終焉期に最後の輝きを与えたのが、日本企業の極洋捕鯨と大洋漁業であった。1966 年、極洋捕鯨と大洋漁業は纽ーファンドランドに捕鯨基地を設置、捕鯨船を派遣して捕鯨に従事した。1966 年から 1972 年までの間に両社合わせてナガスクジラほか計 2474 頭を陸揚げしている。

1972 年 12 月、カナダ政府による商業捕鯨の一時停止決定によって、1898 年から 1972 年までの間に現代型沿岸基地式捕鯨によってナガスクジラほか計 1 万 9632 頭の大型鯨類を陸揚げしたカナダの商業目的の捕鯨は終焉を迎えた。それから 36 年、纽ーファンドランドの捕鯨産業に関わる事柄は日加双方関係者の記憶、産業遺跡の中に残っている。産業遺跡はやがて消え去る運命なのかもしれないが、纽ーファンドランドの捕鯨産業が日加双方の地において記憶の中に末永く留まること、またそのために本発表が多少なりとも貢献することを願っている。

○5 北海道天塩中川地域の最上部中新統声門層より産出した イルカ化石（鯨目：マイルカ科）とその系統学的意義

○村上瑞季（早稲田大学）、嶋田智恵子（秋田大学）、疋田吉識（中川町エコミュージアムセンター）、平野弘道（早稲田大学）

A bizarre dolphin (Cetacea: Delphinidae) from the upper most Miocene Koetoi Formation in the Teshionakagawa area, Hokkaido, Japan and its phylogenetic significance

Mizuki Murakami (Waseda University), Chieko Shimada (Akita University), Yoshinori Hikida (Nakagawa Museum of Natural History), and Hiromichi Hirano (Waseda University)

【緒論】 NMV-6（中川町エコミュージアムセンター所蔵）は、北海道北部に分布する最上部中新統の稚内層から産出した小型ハクジラ類化石であり、珪藻群集化石から標本の年代は 6.4-5.5Ma と推測されている（嶋田ほか, 1998）。NMV-6 は、主として顔面頭蓋と左周耳骨、茎舌骨、椎間板からなる。この時代における日本を含めた北西太平洋域の小型ハクジラ類化石の報告は稀であり、各々の動物についてもそれらを含んだ動物相の全容についても明らかではない。そのため、本発表では NMV-6 の系統学的位置と形態学的特徴について報告しその端緒としたい。

【方法】 本発表では、NMV-6 と現生・化石を含む小型ハクジラ類（外群 1, 内群 27）における 74 の形態形質について、PAUP ver. 4.0 beta 10 (Swofford, 1998) を用い系統解析を行った。

【結果・考察】 系統解析の結果、NMV-6 は右前上顎骨の上向突起が左前上顎骨のそれに比較して幅が狭く短いことなどから、マイルカ科に含まれた。もしこの結果が正しければ、中新統産の頭骨を伴うマイルカ科化石として世界においても HMH 68037（北海道開拓記念館所蔵）に次いで世界で 2 例目となる。

しかしながら、その一方で本標本は、前上顎骨の背側眼窓下孔から矢状方向後方に伸びる "postero-medial salcus" のようにネズミイルカ科に似た形質も併せ持つ。また、現時点において演者らの系統解析結果は、ネズミイルカ科とイッカク科が姉妹群を形成するという近年の多くの分子系統解析結果（e.g., Nikaido *et al.*, 2001; May-Collado *et al.*, 2006; Caballero *et al.*, 2008）と異なり、マイルカ科とネズミイルカ科が姉妹群を形成する。今後マイルカ科に対しては、本標本の再検討も含めて形態学的な見地からのさらなる系統学的アプローチが必要となるだろう。

○6 北上低地帯、竜の口層産ヒゲクジラ類化石, *Herpetocetus* と その古生物学的意義

大石雅之（岩手県立博物館）

Herpetocetus, a fossil mysticete from the Tatsunokuchi Formation in the Kitakami Lowland and its significance in paleontology

Masayuki Oishi (Iwate Prefectural Museum).

ケトテリウム類（科）は、最近まで偽系統群とされてきたが、より限定的な分類群のみからなるとする研究がある。それによれば、*Herpetocetus* は限定的な意味でのケトテリウム科に含まれることになる。竜の口層（最後期中新世～最前期鮮新世、内湾浅海成層）の *Herpetocetus* については、模式種の *H. scaldiensis*（北東大西洋、前期鮮新世）が断片的な標本からなり、記載された標本に異なる分類群の部位が含まれることや、竜の口層から鼓室胞のみで記載された *Mizuhoptera sendaicus* についての命名規約上の問題があったが、頭蓋を含む複数の標本の検討により、分類上の問題はほぼ解決に至っている。さらにごく最近、新たに *H. transatlanticus*（北西大西洋、前期鮮新世後期～後期鮮新世前期）、*H. bramblei*（北東太平洋、最後期中新世～最前期鮮新世）および *H. scaldiensis* の新標本が記載されたことにより、*Herpetocetus* 属全体を総合的に理解できるようになってきた。本発表では、これらのこと踏まえて竜の口層産 *Herpetocetus* の意義を報告する。

ここでは、仙台市から奥州市までの竜の口層から産出した11個体の *Herpetocetus* のうち、とくに IGPS 78423（鼓室胞のみ、仙台産）、SSME 13334（頭蓋・骨格一部、仙台産）、IPMM 43549（頭蓋・下顎骨・骨格、一関産）、IPMM 43551（下顎骨、平泉産）、NSM-PV 19540（頭蓋・下顎骨・骨格、奥州産）について述べる。

標本が完全ではないことから、分類については次のように相補的に考察する必要がある：まず、1) NSM-PV 19540、IPMM 43549、IPMM 43551 の下顎骨から、これらは *H. scaldiensis* のレクトタイプと同属別種と判断できる；2) NSM-PV 19540 の頭蓋から北西大西洋産標本 USNM 182962 および北東太平洋産標本 UCMP 82465 が *Herpetocetus* 属であることが保証される；3) *H. transatlanticus* と *H. bramblei* との比較により、頭蓋をもつ SSME 13334、NSM-PV 19540、IPMM 43549 がひとつの種に含まれ、かつ鼓室胞の個体変異の程度からこれらが IGPS 78423 に同定され、*H. sendaicus* となる。竜の口層の *H. sendaicus* は、年齢の異なる4個体の標本の存在から、あらゆる年齢の個体の存在が示唆され、さらに銚子地域における同時代の外洋の群集に *Herpetocetus* が稀なことから、内湾に定住する北西太平洋沿岸の固有種と考えられる。下顎骨の派生的形質と頭蓋の原始的形質から、*Herpetocetus* は前期中新世に起源が求められ、鮮新世における遺存種であったと考えられる。

○7 日本海海底産のアカボウクジラ類化石について

長澤一雄（山形中央高校）

Fossil beaked whales dredged from the bottom of the Sea of Japan

Kazuo Nagasawa (Yamagata Senior High School)

アカボウクジラ科 *Ziphiidae* では、イカを摂餌する吸い込み法を発達させたため、上顎歯の消失と下顎歯の減少化が進んだ。現生の同科は6属21種を数える大きなグループを形成し、中でもオウギハクジラ属は14種と異様に分化している。同科は中新世以降に放散し、世界中の海洋に分布して化石の産出も多い。ただし、日本産化石は多くなく、また産地が日本海に偏る傾向がある。すなわち、漁船などによって海底からドレッジされた化石が多い。日本海産の化石の形態はやや多様であり、日本のアカボウクジラ科は日本海で繁栄し分化したように見える。

日本海は前期中新世に誕生して以降、海底に海成層を堆積したが、化石はそこに保存された。その後、第四紀の構造運動が活発化して、隆起帯とともに化石包含層も隆起したと考えられる。隆起帯の一部がバンク（堆）で、さらに第四紀に一度陸化して削剥を受け、内部の化石が礫化し、その後沈降したのだろう。化石はこうした水深100～200mのバンクからドレッジされている。大部分の化石は年代が不明である。

オウギハクジラ属 *Mesoplodon*：棒状で堅硬な形態を示す。これは同属に特徴的な、前上顎間溝の鋤骨の化骨が進行し、吻部が緻密化する現象、すなわち吻央化骨によるものである。化石形態では、吻基部が特徴的なコブ状の隆起を示す。同部位の極端な隆起を示す種として、ハワイ沖産のコブオウギハクジラ *M. tumidirostris* がある。日本海産の化石は、これに比較して吻部が全体に小型で、コブの隆起が低く、吻長に対する吻幅が広いなどの差異がある。形態差は種の違いを示すのか、地理的な変異を示すのかなど、今後検討を要する。その年代については、上顎歯の完全な消失、現代型の吻部形態、化石化の状態などから、鮮新世が予想される。

ツチクジラ属 *Berardius*：前上顎間溝が明瞭で、吻央化骨がなく、鼻骨周辺の要素が対称的な頭蓋がしばしば産出する。前上顎骨の後端は鼻骨の後端まで達しておらず、頭蓋のテレスコーピングが進んでいないなど、ツチクジラ属に似る。ただし、現生種に一致する化石はなく多様である。中期中新世の佐渡島産の化石では、小さな多数の上顎歯が剖出されており、同属がその頃に上顎歯を失いつつあったことがわかる。

所属不明の化石：現生タクサに比較できない化石が産出する。飛島沖産化石は、やや大型で太く短い棒状形態をなすが、吻央化骨はない。歯槽は痕跡的であり、歯の萌出する余地はなく、アカボウクジラ科の特徴を示すが、比較できる現生タクサはない。能登半島沖産化石は、一見棒状の吻部でオウギハクジラ属に似るが、前上顎骨の後退は鼻骨の前半で停止してテレスコーピングが発達しない。また前頭骨が強く前方へ突出する。こうした形態をもつ現生タクサは、やはりない。